

地域力を生かす、幕別町図書館

図書館を核にした まちづくりへの挑戦



幕別町図書館本館

3つの力を図書館づくりに生かす

幕別町は帯広市に隣接するまちで、人口約2万7千人。市街地は帯広市に近い札内地区、役場本庁舎などがある中心部の幕別本町、2006年の合併で編入された忠類地区に分かれていて、それぞれに図書館があります。

ぜひ訪問してもらいたいののが、幕別町図書館のホームページ (<http://mcl.makubetsu.jp/>) です。「今日の一冊」「千本万架 今月の特集本」「北の本箱」など、トップページには本が並んでいるようにデザインされています。そして、本棚がそこにあるような「バーチャル本棚」が掲載されています。これらのコンテンツは図書館の展示にリンクしていて、家庭でも図書館の展示コーナーを実感で



幕別町図書館のホームページ



蔵書管理システムの改変を機に、地域とのつながりを深め、より地域に密着した図書館づくりに挑戦しているのが、幕別町図書館です。図書館は町内に本館・札内・忠類の3館がありますが、本館を訪ねて、これまでの取り組みを取材しました。



大人と子どもの間、10代向けの本が並ぶ「はざま文庫」。ホームページ(右)と連動しているほか、高校生のまぶさスタッフが表紙の漫画を描いた本のリスト紹介「はざま通信」を配置



毎月テーマごとに展示する月展示。1月は「真冬の災害」がテーマ。ホームページの「千本万架 今月の特集本」をクリックすると、右のページにリンクしている

きるのです。また、「今日の一冊」は毎日更新され、その日にちなんだ本が紹介されています。

幕別町図書館が図書館の運用を見直すきっかけになったのが、蔵書管理システムの更新です。2014年に幕別町図書館では、全国で初めて「カメレオンコード」を図書館業務に全面的に導入しました。カメレオンコードとは、バーコードやICタグに代わる基盤技術として物流管理などに活用されているものです。カラーバーコードとも呼ばれていて、色の違う正方形のモザイク模様の中に情報を収録して管理をする技術です。これに自治体の文書管理システムの技術をベースに開発された書架の業務支援システムを導入し、書棚単位で

管理ができるようになりました。これによって蔵書管理や窓口業務の大幅な効率化が図られました。

蔵書管理システムを見直す過程の中では、単にシステムを更新するだけでなく、今後の幕別町図書館のあり方についても議論がなされました。当時は図書館のホームページを館長自らが手がけ、斬新だと話題になっていたことから、ホームページによる情報発信の重要性も認識されていました。

そこで、蔵書管理システムの改変を契機に、図書館が地域の核となり、より親しみやすい存在になろうという「図書館改革プロジェクト」が始まります。そこでは、図書館にある本棚、ホームページなどのインターネット、地域の人、この3つの力を生かして図書館を運営していくことを掲げました。



3世代で閲覧したり選んだりできるように本を配置したエリア

著名人からの寄贈本が並ぶ「北の本箱」

幕別町図書館では、以前から地域に関わる人たちの力が生かされていました。それが1997年に始まった「北の本箱」です。これは本の置き場所に困っている作家や評論家などの著名人から寄贈してもらった蔵書が並ぶコーナーです。幕別町出身のジャーナリスト、故和多田進さんが呼びかけて始まったもので、寄贈者には和多田さんをはじめ、小説家の森村誠一さんや劇作家の平田オリザさん、資生堂名誉会長の福原義春さんなど18人が名を連ねます。すでに3万冊を超える蔵書数になっていて、今でも定期的に新刊を寄贈してくれている人もいるため、図書館の貸出カウンター横に



赤の本が並ぶ書棚
(下) や寄贈者を紹
介したパネルもあ
る北の本箱

ある北の本箱コーナーには新刊本を探して必ず立ち寄っていく来館者がいるほどです。

このコーナーで目を引くのが、赤い本が並ぶ書棚の1枠。福原さんから寄贈された本の中から、資生堂のイメージカラーの赤の表紙の本を並べています。こうした書棚を展開できるのも、蔵書管理システムの効率化が大きく影響しています。

「カメレオンコードを導入した背景には、北の本箱の存在がありました。いろいろな方から寄贈いただいた本を従来の請求記号で並べると、ばらばらになってしまいます。贈っていただいた方の人となり、その方が持っている本の空気感のようなものをそのまま並べたいと思いました」と司書の民安園美さんはいいます。

こうした展示は日本十進分類法の請求記号をベースにする蔵書管理でも可能ですが、カメレオンコードの導入でかなりの省力化が図られました。また、これまで8日かかっていた蔵書点検が1日で済み、利用者にとっては休館日が減るなどのメリットがあります。

さらに自由自在に書棚の中を変えられることで、北の本箱だけでなく、書棚や展示を独自の発想で展開できるようになり、館内はジャンルやテーマごとに本を自由に並べています。スタッフは蔵書管理の省力化によってできた時間を展示やホームページでの情報発信などに当てられるようになり、時間の使い方が変わったと言います。

地域の人の力を生かす

地域の人の力を生かすために幕別町図書館で取り組んだのが、図書館づくりをサポートしてくれる人たちとのネットワークづくりです。

図書館の重要な役割の一つにレファレンスがありますが、中でも増えているのがまちの歴史などの地域情報の問い合わせだと言います。図書館の活動の中では、地元の関連図書や新聞を集めるだけでなく、多面的な観点でまちの情報を集めていくことも、次の時代に地域の足跡を残していくために重要なことです。そこで、そうした活動を担ってもらうために、地域情報の収集や編集、インターネット上での発信、図書館の書棚づくりやイベント企画などを担う人を募集することになりました。そして、そのための編集力を養成する「Editまくべつ2015 編集力養成講座」を2015年度に開催しました。20名が講座を修了し、その後「まぶさLED（まくべつBOOKサポーター/図書館エディター）」（以下、まぶさ）として、書棚づくりやインターネットでの情報発信など、図書館づくりを住民の視点で支援してきました。ホームページには、まぶさのこれまでの活動やまぶさスタッフが集めたまちの情報などが掲載されています。

また、図書館ではまぶさが担当する展示コーナーを設けています。住民が自ら選書をするので、「認知症」といったより身近で関心の高いテーマで構成されてい



まぶさが選書を担当する展示コーナー

ます。図書館外の人々の視点が入ることで、より利用者
の視点で図書館を運営していく、新しい風を吹き込んで
いるようです。

幕別町図書館では、これまでも読み聞かせなどの
住民ボランティアが活動していましたが、こうした図書
館を支えてくれる人たちのネットワークを幅広く広げ、
図書館づくりだけでなく、まちづくりにも生かしてい
きたいと考えています。

図書館と福祉との連携が生まれる

地域の人の力を生かす中で、もう一つ生まれてきた
のが福祉分野との連携です。

図書館が本を購入する際は、「装備」と呼ばれる本
を保護するために透明なフィルムコートをかけて納品さ
れます。この作業は手間がかかるため、納入は東京の
専門業者が担当していました。しかし、2015年度からは
すべて地元書店から直接購入しています。地元書店か
らの提案で、装備作業を地元にある福祉施設に依頼
することになったのです。図書館は最初に装備の作業
の指導に当たりました。

装備の作業は寄贈本もあるため、図書館の業務を
圧迫する作業でしたが、今では障がい者の活躍の場
になっています。また、年間5,000冊ほどの購入費が地
域の中に循環する仕組みを創出したこととなります。
図書館と書店、福祉施設が連携して、域内循環と障
がい者の雇用を生み出しています。

2013年、地元の幕別高等学校の中に中札内高等養
護学校の幕別分校が開校しました。普通高校と高等
養護学校が校舎を共有するかたちは道内初で、知的

障がいのある生徒
が学んでいます。幕
別町図書館では幕
別分校の実習を受
け入れ、図書の展
示や書棚、蔵書の
整理などを生徒た
ちが担っています。

取材で訪問した
日も幕別分校の生
徒たちが作業学習
を行っていました。
この日は、幕別町
図書館のオリジナル
グッズの布バック
を作成。キャラク
ターデザインに長
けた司書が作成し

たオリジナルデザインのキャラクターを、1枚1枚シル
クスクリーンで印刷していました。ある女子生徒は「イ
ンクの量の調整が難しい」と慎重に作業をしていま
した。このオリジナルグッズは、まぶさと連携し、販売
につなげていく予定です。

図書館が地域のさまざまな人たちとつながりを深め
ることで、まちづくりの触媒役になっていく可能性が感
じられます。

図書館が住民の健康をサポート

幕別町は、パークゴルフ発祥の地としても知られて
います。パークゴルフは世代を超えて楽しめるスポー
ツで、町民のコミュニティを維持することにもつながっ
ています。こうしたパークゴルフによる健康とコミュニ
ケーションの効果に着目し、2016年度から取り組んで



中札内高等養護学校幕別分校の生徒が担当する展示コーナー。手作りポップとともに本を紹介



中札内高等養護学校幕別分校の生徒たちの作業学習。布のバックにシルクスクリーンでキャラクターを印刷



ストレスチェックコーナー。測定器は本館と札内、忠類の3館を巡回するため、1カ月に各館10日ほど設置される



ストレスチェックの際に結果に合わせて配布しているブックリスト

するとポイントがつくもので、ストレスチェックを受けるとポイントが付加されます。

また、ストレス解消に効果的な笑いを事業に取り入れようと、図書館で定期的に落語会を開催するなど、ストレス解消をテーマに楽しい事業もスタートしました。

これらの取り組みは、近隣町にも影響を与えたようです。2016年度から幕別町では池田町、浦幌町、豊頃町とともに十勝東部4町交流連携事業を行ってきましたが、2018年度は健康講座を持ち回りで実施することになり、10月から11月にかけて「図書館と本で健康になろう!」をテーマにそれぞれのまちで講座が開催されました。

また、幕別町は認知症とストレス、池田町は血液や心臓などの循環系、浦幌町は食、豊頃町は発達障がいなど、健康や医療の中でも、それぞれがテーマを決めて図書を分担収集するようになっていきます。分担収

いるのが「ストレスチェック」事業です。図書館にストレス度合いを測る測定器とストレスケアに関するブックリストを配置。希望者にストレスの測定を行い、結果に基づいてお薦めの本を紹介しています。

2017年度からは、保健課が所管している「まくべつ健康ポイントラリー」に参加。これは、健康的な生活習慣を身につけるきっかけづくりにしてもらおうと、町が実施する健診や健康講座などに参加

集の成果を生かすために、各町の図書館がお薦めする「健康になる本リスト」も作成し、講座や講演会、館内で配布しています。十勝では管内在住者はどこの図書館でも本を借りられるほか、相互貸借ができるので、読みたい本があれば、住んでいる町の図書館から本を取り寄せることもできます。本を通じて健康増進や予防医療への取り組みが、じわじわと広がっているのです。

活字と笑いで活気あるまちに

これらの幕別町図書館の取り組みは、2016年度から地方創生推進交付金を活用しています。目指すのは、「図書館を核とした活字と笑いで活気あるまちづくり」です。

「単に本の貸出だけでなく、地域の皆さんの居場所になるような図書館づくりをしていきたい」と武田健吾館長。また、司書の民安さんは「時代の要求を受け止めて図書館が変わっていくことも大切ですが、“地域の知”を残して伝えていくことも重要な役目。地域が求めていることに耳を傾けつつ、これまでの図書館の慣習を打ち破ることも必要だと思います」と、地域に必要とされる図書館を探りながら、どのように地域の中で役割を果たしていくかを考えています。

一連の図書館改革の中で、近年は行政からの調べ物の依頼が増えてきたり、「ホームページを見てきました」と新しい来館者が見られるようになったり、その手応えを感じているようです。

図書館を核にしたまちづくりへの挑戦は、まだまだ続いています。これからどんな展開をしていくのか、期待したい取り組みです。



北の本箱をバックに、武田館長（左）と司書の民安さん